

萬葉に現れた稻の一生

森 本 治 吉

甲 稻 と 米

○稻 寄_シ稻 7一三五三の標目

稻_ヲ齋_ハばかがる我が手を今_ニ寄_ルもか殿の若子が取りて嘆かむ14
三四五九其他

〔人名〕「稻」大伴宿禰稻公4三六七・庶弟稻公4三六七、菟氏

稻布5八三二

〔稻〕甘稻3三八五

〔地名〕稻日都麻4五〇九、稻日野3二五三、稻見野6九三八・

9一七七二、稻見乃海3三〇三

〔稻の借訓〕 稻目、明けゆきにけり10二〇二二、吾稻金津、夢
に見えこそ11二九八七、あな千稻千稻志吾が恋ふらくは16三
八四八

○米 普通の米の用例なし

〔米の借訓〕 眷向の檜原に立てる春體おほしく思はば名積米や

も10一八一三、阿米へゆかば5八〇〇、安米の降る日を17四

〇一一、有米の花5八五〇、許米てしぬばむ14三五七五、勢

米寄り来る15八〇四、其他数十例

〔人名〕久米女郎8一四五六、久米禪師2九六、久米女王8一
五八三、久米朝臣広羅18四〇五〇其他

○早稻 をとめ等に行逢の速稻を刈る時になりけらしも芽子の花

咲く10二一一七 吾が蒔ける早田の穂立造りたる鬻ぞ見つつ

しぬばせ吾が背8一六二四

吾妹児が業と造れる秋の田の早穂の鬻見れど飽かぬかも8一
六二五

○粳 〔借訓〕「有粳」またも逢はむ因もあらぬか。白たへの我が衣手

に齋ひ留めむ4七〇八

〔荒粳〕 春の野に心のべむと念ふどち来りし今日は暮れずも

あらぬか10一八八二

〔注〕「粳」はウルチ米「モチ米の反対で、ねばらぬ米」の
ことだが、それを誤つて「糠」字と同一視して、助動詞のヌ
と助詞カとの連接語ヌカに使つた誤用字の例)

○女と豊業 春日すら田に立ち疲る君は哀しも若草の妻無き君が田

に立ち疲る7一二八五

吾が門の五株柳つつもつつも母が恋ひすす業ましつしも20

四三八六

其他に、右記の『早稲』の例歌 8・1六二四・8・1六二五、左記の『種』の例歌 15三六〇三、『苗代』の例歌 4七七六、『田』の例歌 10二二五二、『雑草』の例歌 10二九四二、『蒔く』の例歌 10二二四四、『刈る』の例歌 9一七五八、『蔵』の例歌 10一七二〇、『齋く』の例歌 14三四五九及び『新嘗』の例歌 14三三八六・14三四六〇を参照。

(参考の爲、男が農業に働いた確実な例歌をあげておく。『種う』の例歌 15三七四六、『田居』の例歌 10二二四五・10二二四八・10二二四九、『引板』の例歌 8一六三四を参照。)

乙 種蒔から收穫まで

○種 水を多み上に種蒔き稗を多み扱あらびし業わざぞ吾がひとり寝る 11二九九

斎種蒔く新墾あきの小田を求めむと足結あひゆひ出で濡れぬ此の川の瀬に 7二二一〇
青楊の枝伐り下し斎種蒔き忌忌いみし君に恋ひわたるかも 15三六〇三

○蒔く 住吉の岸を田に墾り蒔きし稲さて刈るまでに逢はぬ君かも 10二二四四

前記の『種』の例歌三首は『蒔く』の例歌にもあたる。

○種う 人の種うる田は植まます今更に国別れて吾は如何にせむ 15三七四六

……古へよ 今の現に 万調 奉る長上と 作りたる 其の農業を 雨降らず 日の重なれば 植ゑし田も 蒔きし畠も

朝ごとに 洞み枯れ行く 18四二二二
佐保川の水を塞き上げて植し田を 8一六三五
其他、『引板』の例歌 8一六三四、『蔵』の例歌 9一七二〇を参照。

○苗 上つ毛野佐野田の苗の群苗に事は定めつ今は如何にせも 14四一八

○苗代 言出しは誰が言なるか小山田の苗代水の中淀にして 4七七六

○墾る 墾田地を檢察する事に縁りて、礪波郡の主張田治比部北里の家に宿る 18四一三八題詞 住吉の岸を田に墾り蒔きし稲さて刈るまでに会はぬ君かも 10二二四四

○佃 竊ひそかに以もみるに 朝夕 山野に佃食テウジキする者も 猶 災害無くして世を度るを得 5癪しほに沈みて自ら哀む文

(但しこの「佃」は狩猟する意味に使はれてゐる。)(「佃」字の農耕以外の意味の例として参考の爲ここにあげておくまでである。尙出雲風土記に「山田を佃りて守りき」の例がある。)

あしひきの山田佃子秀ツクルゴヒですとも繩なはだに延へよ守ると知るがね 10二二一九

春日すら田に立ち疲る君は哀しも若草の妻無き君が田に立ち疲る 7二二八五

「垣津田」……神南備の 清き御田屋の 垣津田の 池の堤の…… 13三二二三

〔金門田〕 可奈刀田を粗垣間ゆ見日が照れば雨を待と如す君を待とも 14三五六一

〔門田早稲〕 橋を守部の里の門田早稲刈る時過ぎぬ来じとすらしも 10二二五

〔鹿猪田〕 盞合はば相寝むものを小山田の鹿猪田禁る如母し守らすも 12三〇〇〇

〔峯ろ田〕 安房をろの乎呂田に生はるたはみづら引かばぬるぬる吾を言な絶え 14三五〇一

〔山田〕 あしひきの山のと陰に鳴く鹿の声聞かすやも山田守らす見 10二二五六

まつがへりしひにてあれかもさ山田の翁がその日に求め金はすけむ 17四〇一四

照 〔佃〕の例歌 10二二一九・『カビ屋』の例歌 11二六四九等参

〔田多婢〕 あかねさす屋は田賜びてぬばたまの夜の暇に摘める芹子これ 20四四五五

〔アガチ田〕 天平元年班田の時の使葛城王、山背国より隣妙観命婦等の所に贈る歌一首 20四四五五

〔班田史生〕 天平元年己巳、撰津国班田史生丈部菅鷹が自ら經死にし時：3四四三

〔私田？〕 住吉の小田を刈らす子賤かも無き、奴あれど妹が御奈と私田(ワオナシタ)刈る 7二二七五

○田居 劍の後玉巻き田井に何時までか妹を相見ず家恋ひ居らむ 10二二四五

秋の田を借廬作りいほりしてあるらむ君を見むよしも 0

二二四八 鶴が鳴の聞こゆる田井にいほりして吾旅なりと妹に告げこそ

○水田 詠水田 10二二一九の題詞

○庄 〔竹田庄(今の、奈良具磯城郡耳成村大字東竹田の地)〕 大伴坂上郎女、竹田庄より女子大嬢に贈賜れる歌 4七五九題詞

大伴家持、姑坂上郎女の竹田庄に至りて作る歌 8一六一九題詞

〔跡見庄(今の、奈良具磯城郡桜井町の東南十町ほどの地)〕 大伴坂上郎女、跡見庄より、宅に留れる女子大嬢に贈賜れる歌 4七二三題詞

典鑄正、紀朝臣鹿人、衛門大尉大伴宿禰稻公の跡見庄に至りて作る歌 8一五四九

○代 確とあらず五百代小田を刈り乱り田廬に居れば都し念ほゆ 8一五九二

○灌溉 佐候河の水を築き上げて植ゑし田を 8一六三五

…植ゑし田も 蒔きし畑も 朝ごとに しほみかれゆく… 18四一二二

○歌 畝火 4五四三・畝火の山 1二九・1五二・2二〇七

○畔 …時に手を携へて曠く江河の畔を望み 酒を訪ひて迥に野客の家に過る 17三月三日大伴家持、七言一首の序。

○雑草 〔稗〕打つ田には稗はも教多ありといへど扱えし我ぞ夜一人寝る 11二四七六

〔田草〕 ほととぎす鳴く音聞くやうの花の咲き散る丘に田草

引くをとめ 10 一九四二

○穗

…宮の前に二つの樹木あり。此の二つの樹に斑鳩いかりが比米二つ鳥太く集まれり。時に勅して多くの稻穂をかけてこれを養ふ

1 六

秋の田の穂向の縁よれる片縁りに君によりな言痛こゝろかりとも 2

一 一四

秋の田の穂向の依れる片縁りに吾は物念ものふつれなきものを 10

二 二四七

○田守タモリ

我が門に禁る田を見れば佐保の内の秋はぎすすき思ほゆる

かも 10 二二二一

○引板ヒキタ

衣手に水渋つくまで植えし田を引板吾が延へ守れる苦し 8

一 六三四

○標イソカ

石上布留いそのかみの早田わさだを秀ひですとも縄しなだに延へよ守りつつ居らむ 7

一 三三五

○カビ屋カビヤ

あしひきの山田守の翁おきなが置く蚊火の下焦れのみ余が恋ひ

居らく 11 二六四九

朝霞鹿火屋あさぎりが下に鳴く蟬声だに聞かば吾恋ひめやも 10 二二六

五

朝霞香火屋あさぎりが下の鳴く蟬しめびつつありと告げむ兒もがも 16

三 八一八

○廬イホリ

秋田刈る借廬も未だ壞たわば雁が音寒し稻も登のぼきぬかに 8 一

五 五六

秋田刈る飯廬の宿匂ふまで咲ける秋菽見れど飽かぬかも 10 二

一 〇〇

○田廬タノ

秋の田を飯廬造り廬して我旅なりと妹に告げこそ 10 二二四八

唐曰は田廬のもとに吾が兄子にはふふに笑みて立ちませり

○店手トヤテ

見ゆ 田廬者、多不世反 16 三八一七

○杵キネ

「杵の借訓」此の二石は肥前国彼杵郡平敷の石なり。占に当

りて取る 5 八一三の序

丹杵火にし家ゆも出でて 3 四八一、吾はぞ追へる遠杵土佐道

を 6 一〇二二、…朝露の消易杵いのち 袖のむた 争ひ

○鎌

玉掃、鎌、天木香、囊を詠める歌

○刈る

玉掃刈り来鎌麻呂室の樹と囊が下を播掃かむ為め 16 三三八〇

○刈る

筑波嶺の裾廻の田井に秋田刈る妹がり遣らむ黄葉手折らな

○刈り

9 一七五八

○倉

吾を言なさむ 4 五二二

○鬘カマツ

吾妹子が赤裳漬ちて植えし田を刈りて蔵めむ倉無の浜 9 一七

○鬘カマツ

新墾田の猪鹿田の稻を倉に積みてあなひねひねし我が恋ふら

○鬘カマツ

坂上大娘、秋の稻の鬘を大伴宿禰家持に贈れる歌一首

○鬘カマツ

「早稻」の例歌 8 一六二四・8 一六二五参照

丙 精白・飯食とその用具

○齋^ツ 稻舂けばかかる吾が手を今宵もか殿の若子が取りて歎かむ

14三四五九

おして否と稲は舂かねど浪の穂の甚振らしも昨夜一人寝て

14三五五〇

○白

「辛^に確」「碓子」……もむ楡を 五百枝剝ぎ垂れ 天光るや
日の氣に乾し 轉るや 辛^に確に舂き 庭に立つ 碓子に舂き

16三八八六

「可流羽須」可流羽須は田廬のもとに吾が背子はにふふに笑
みて立ちませり見ゆ16三八一七

○穢^ス

「借訓」「触^ツ穢」吾が袖に降りつる雪も流れゆきて妹が袂にい
行き触れ穢10二三二〇

○穢^ス

「借訓」「落^ツ穢」ひさかたの雨も降穢雨づつみ君にたくひてと
の日暮さむ4五二〇〇

「有穢」佐保河の小石踏みわたりぬばたまの黒馬の来る夜は
年にもあら穢4五二二五

○箕

「借訓」「夏箕」大滝を過ぎて夏箕に添ひてみて淨き河原を見
るがさやけさ9一七七三七

「浦箕」……浪の上を い行きさぐくみ 磐の間を い往き
もとほり 稲日づま 浦みを過ぎて 鳥じもの なづさひ行
けば……4五〇九

ゆらの埒潮干にけらし白神の磯の浦みをあへて漕ぎとよむ9
一六七一

住吉の岸の浦みに重く浪のしばしば君を見むよしも11二

七三五

「往箕」たもとほり往箕の里に妹を置きて心空なり土は踏め

ども11二四五二

○新^ニ嘗

鴉鳥の葛飾早稲を爾^ニ倍須^ハ（饗す）とも其の愛^かしきを外に立
てめやも14三三八六

誰ぞこの屋の戸押そふる爾^ニ布奈末^ニ（新嘗）に我が背をやりて
齋ふこの戸を14三四六〇

○甌^コ

……甌には 火氣吹き立てず 甌には 蛛蜘蛛の巢かきて 飯
炊ぐ 事も忘れて 奴延鳥の 呻^の吟^ひ居るに……5八九二

○甌^コ

同右
飯喫めど うまくもあらず 行き往けど 安くもあらず あ
かねさす 君が心し 忘れかねつも16三八五七

○甌^コ

佐保河の水塞き上げて植えし田を疇^の早飯^ははひとりなるべし
8一六三五

尙、「酒」の例の、「味飯を水にかみなし16三八一〇」『盛る
飯』の例の「盛る飯2一四二」と「飯盛而」の三首参照

「盛る飯」家^にあれば筥に盛る飯を草枕旅にあれば椎の葉
に盛る2一四二

荒雄らを来むか来じかと飯盛りて門に出で立ち待てど来まさ
ず16三八六一

○箸

父母が 成しのまにまに 箸向ふ 弟^ちの命^{みこと}は 朝露の 消安
き命 神のむた 争ひかねて……9一八〇四

○鉢

「人名」櫻氏鉢麻呂5八三八の作者
思ひやるすべの無ければ片埒の底にぞ吾は恋ひなりにける
（土埒の中に注せり）4七〇七

○杯フキ 無き宝と言ふとも一杯の濁れる酒に豈まさらめや三四五
酒杯に梅の花浮け思ふどち飲みての後は知りぬともよし 8 一
六五六

かしまねの 机の鳥の 小螺わたかを い拾ひ持ち来て……辛塩に
ことと揉み 高杯に盛り 机に立てて 母に奉りつや めづ
見の刀自 父に猷りつや みめづ見の刀自 16 三八八〇

○釀 ……伏せ廬の 曲げ廬の内に 直土に 釀解き敷きて 父母
は 枕の方に 妻子どもは 足の方に 囲み居て 憂ひさま
よひ……5 八九二

○稻イナムシ 庭 たま梓の道行き疲れ伊奈武思侶敷きても君を見むよしもが
も 11 二六四三

ひこ星は 織女と 天地の 別れし時ゆ 伊奈宇志呂 河に
向き立ち 思ふ空 安からなく……8 一五二〇

○酒 「醸む」君が醸みし待ち酒安の野に一人や飲まむ友無しに
して 4 五五五

味飯を水に醸みなし吾が待ちしかひは曾てなし直にしあらね
ば 16 三八一〇

「味酒」味酒 三輪の山 あをによし 奈良の山の 山の際ま
に い隠るまで 道の隈 い積るまでに つばらにも 見つ
つ行かむを……1 一七

「糟湯酒」風まじり 雨降る夜の 雨まじり 雪降る夜け
術も無く 寒くしあれば 堅塩を 取りつつしろひ 糟湯酒
うちすするひて……5 八九二

○酒屋 梯立の熊来酒屋に真鳥らる奴わし 16 三八七九

珠名塚をたづねて

卷九の雑歌部、高橋連蟲麻呂歌集所出歌に、

しなが鳥 安房に継ぎたる 梓弓 周淮の珠名は 胸別の 広
き吾妹 腰細の すがる娘子の その顔の きらきらしきに
花の如 笑みて立てれば 玉梓の 道行く人は 己が行く 道
は行かずて 呼ばなくに 門に至りぬ まし並ぶ 隣トナリの君は あ
らかじめ 己妻離れて 乞はなくに 鍵さへ奉る 人皆の か
く迷へれば うちしなひ 縁りてぞ妹は たはれてありける
(9 一七三八)

反 歌

金門かみどにし人の 夾立てば夜中にも身はたな知らず出でてぞ逢ひけ
る (9 一七三九)

とある。この歌の主人公上総の周淮の珠名は、下総の葛飾の真間の
手児名とともに、そのかみ房総の産んだ美人で、今ならさしづめミ
ス上総といふところであらう。

その珠名の塚をたづねて、私は七月の某日、昔の周淮郡——今の
君津郡飯野村のさる部落に足をはこんだ。折柄の梅雨空の下、植付
を終つたばかりの水田の間をたどつてとある小川の畔に出る。水面
には若葦がスクスクと脊伸びをし、堤の上には雑草にまじつて茜や
葎あざみがむらがつてゐる。白鷺が時折緑の稲田の上にクツキリ白い斑を
落す——いゝなあとと思つた瞬間、いつの間にか私の頭は千年の昔に
かへり、珠名娘子の住んだのどかな周淮の里のイメージを描く——。

村人に教へられた内裏塚はすぐそれとわかつた。かなり大きな前
方後円陵で、とても里の娘子の墓とは見えない。小松の間の、腰まで
つく茅葺を分けて塚の上に出ると、一面の雑草に埋もれて「珠名塚
碑」といふ古ぼけた碑が目につく。次の瞬間私は少し磨滅しかけた
碑面の漢文を、憑かれたやうにノートしてゐた——。(竹内生)